

教育等のマイナスの面は殆ど何一つとしてアメリカの新聞に紹介されていないのである。それぞれの国民がやがて、両者たがいによりバランスのとれた見方ができるようになること、そして、相手がどこの国民とも同じく、長所とともに欠点をも備えたふつうの人間の集りであることを認識する日がやってくること——このことを私は希望するのである。

(アメリカ、メアリ・ボールドウィン大学助教授、同志社女子大学交換教授 訳・北垣宗治、大学文学部教授)



同志社校地出土の埋蔵文化財 (4)

たた ちからつ あめゆつば 叩き唐津飴釉壺

鈴木 重治



同志社同窓会館・幼稚園地点出土(安土・桃山時代) 残存高一六・八cm、底径一六・五cm、胴部最大径一九・二cm

茶人たちの間では、一楽、二萩、三唐津という格付が現在でも生きている。「楽の世界」や「萩の世界」は、すでに茶陶意識が前提として存在していて、類型化の傾向が強いのに対して、「唐津の世界」は、その出発点が雑器であることによって、意識過剰

の脆弱さがなく、機能性に富んだ陶器の底流を的確に捉えている点でも、個性的である。

唐津陶の出現の時期については、多くの見解があるが、考古学的には、天正年間(一五七三―一五九二)にその初現が認められている。これも発掘調査の進展による近世の土器・陶磁器の編年研究の成果である。

同志社同窓会館・幼稚園の新築に先立つ発掘調査でも、中世の寺院址や近世の公家屋敷に伴う遺構・遺物が検討され、多くの資料が出土している。ここに示した「叩き唐津飴釉壺」は、一九七九年十月下旬に「SK2032a」と呼ばれた土坑から出土したものであり、瀬戸の肩衝茶入、丹波の播鉢、多量の土師皿が伴出している。

年代は、土師皿の編年の位置から天正年間でも前半に属するものと考えられる。したがって、初現期の唐津陶であることが認められる。なお、丸味の強い肩部や底部の大きい安定したプローションと共に、内体部の全面に認められる叩き技法に伴うあて木痕の青海波や、全面に施釉された木灰釉も特徴的である。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)